
ある恋心

リム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある恋心

【Nコード】

N9688T

【作者名】

リム

【あらすじ】

親友に片思い。

夢を追いかける彼の相談に乗る。

好きな人とご飯を食べた。

27にもなつて、恋だ何だというのは気恥ずかしいが。しかも、食べたのは一食500円くらいのファストフード店のハンバーグだ。その日は、仕事の後に大学時代の男友達二人と会う約束をしていて、そのうち一人から「仕事が長引いたから、飯は先に食べていてくれ」と連絡があつたのだ。つまり私は長年の親友に恋をしていて、しかも彼は既婚者で、全くなわぬ恋を何年もしていた。

とはいえ、好きな人とご飯を食べるのは心が躍るものである。

彼は駆け出しの作家で、と言つても一冊本を出ただけでそんなに売れているわけでもなく、どちらかというと作家志望のフリーターと言つたほうが正しい。その日も、金がないというので、ファストフードに落ち着いたのだ。

目下の話題は、執筆中の作品についてだった。何でも、男女四人がワンボックスカーで東京を離れはるばる旅をする車内の会話や心情を、淡々と描くというもので、ただでさえ遅筆な彼は編集者との折り合いが悪く、執筆は一向に進まないという話だった。

「それでさ、編集が替わるって話になつただけ、その新しい編集者が……」

「奥さん？」

「そういうこと。」

彼の奥さんはやり手の編集者で、彼が書いている出版社に勤務している。

「私なら書かせられるって、編集長に掛け合つたらいいんだ。」

「なかなかの自信ね。で、どうなの？」

「それがなあ……、リードしようとするあいつのペースにかき回されて、話は進んでも、何だか俺が書いたような気がしないんだ。」

私だったら。

と、つい思ってしまった。彼が大学を卒業して、作家になるという夢を打ち明けられてから、私は彼の最初の読者だった。読んでも大したことは言えないので、アドバイスをするというよりは、書きかけの原稿を読んで感想を言い、彼の愚痴を聞きながらアイデアをまとめる手助けをする。まあ、彼が奥さんに出会って、私の仕事も忙しくなり、最近はそういう機会も減っていたのだが。それでも私は、彼の手助けができるのがうれしく、元々小説を読むのも好きだったので、彼に書きかけの原稿を読まされるのを楽しみにしていた。しかし、そこまで信頼されているのも、彼が私の恋心に気付いていないからだった。きつと打ち明けたらこの距離感は崩れてしまう。そう思っ、彼に気付かれないよう、私は細心の注意を払っていた。お互いの恋愛相談もし合う中で、私が全く彼の好みではないということは分かっていったのだ。

私だったら、彼をそつとサポートして、彼の書きたいものを書かせるのに。彼の好きそうな小説を差し入れたり、一見関係なさそうでもインスピレーションにつながるような自分の体験をぐだぐだ語ったりして。まあ、それもただの願望だった。彼の側にいられたら…というのは、彼を好きになって以来何年間も繰り返してきた妄想で、誰にも打ち明けられない、私の趣味だった。結局のところ、私は彼の親友兼読者として今の位置にいられることを大切に思い、彼に気持ちを打ち明けることすらできずにいるのだから。

「それで？奥さんには何か言うつもりなの？やっぱり編集は替わってほしいとか。」

「うーん…それがいいんだろうけど、なかなか言いづらいな。やっぱり。今まで編集者と折りが悪かったのは俺だし、彼女は俺の執筆ペースが上がったことに満足してるし。」

「でも、自分の満足いくものにはなっていないでしょ？」

「満足がいけないっていうか自分の書いたもののような気がしないっていうか…客観的にはいいものになってるのかもしれないんだけど。」

「客観的にって何よ。あんたが書きたいものを書くのが大前提だよ。うが。」

自信も元気もない彼の言葉に、私はつい熱くなった。

「私があんたのファンだったら、そんなもの読みたくないわ。」

言ってから焦った。そんなの大きなお世話だ。彼の奥さんに対する嫉妬も混じっているかもしれない。男同士の友情ってやつぱり私には難しい。

だが彼はくすつと笑った。

「初期からの読者にそう言われちゃしょうがないな。」

どきん、と胸が高鳴った。そういうことをそういう表情で言うから、ずるいんだ。基本的に人にそんなに心を開くタイプではない彼が、そんな無防備な顔で楽しそうに笑う度、私はますます彼を好きになってしまう。

そんな気持ちを気取られないように、わざと明るく言う。

「明日は仕事休みだしさ、いつもみたいにとことん飲みながらバカ話でもしたらアイデアとか浮かぶんじゃない？付き合うよ。どうせ、私たちとの会話からも断片拾ってきてるんでしょ。」

「そうだな。気分転換といくか。小説が売れたら、アイデア代としておこるよ。」

「そのセリフ、いつも聞いている。」

彼の携帯が鳴った。

「お、あいつももう少しで着くつてさ。いつもみたいにきつと愚痴いっぱい抱えてくるんだろ。うな。そろそろ店探しとくか。」

「だね。じゃあ、そろそろ出よう。」

席を立て、ごちそうさま、と店員に声をかけ、明るい店内を後にする。

「あ。」「あ。」

二人で声を上げる。

「雪だ。」「雪だね。」

初雪だ。今年は幸せだ。私は、今年の初雪を彼と見られたことに、

ひそかに心を弾ませるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9688t/>

ある恋心

2011年10月9日07時53分発行